『主イエスが語る信仰へ』ヨハネ11:38-44

11:38 イエスはまた激しく感動して、墓にはいられた。それは洞穴であって、そこに石がはめてあった。
11:39 イエスは言われた、「石を取りのけなさい」。死んだラザロの姉妹マルタが言った、「主よ、もう臭くなっております。四日もたっていますから」。
11:40 イエスは彼女に言われた、「もし信じるなら神の栄光を見るであろうと、あなたに言ったではないか」。
11:41 人々は石を取りのけた。すると、イエスは目を天にむけて言われた、「父よ、わたしの願いをお聞き下さったことを感謝します。
11:42 あなたがいつでもわたしの願いを聞きいれて下さることを、よく知っています。しかし、こう申しますのは、そばに立っている人々に、あなたがわたしをつかわされたことを、信じさせるためであります」。
11:43 こう言いながら、大声で「ラザロよ、出てきなさい」と呼ばわれた。
11:44 すると、死人は手足を布でまかれ、顔も顔おおいで包まれたまま、出てきた。イエスは人々に言われた、「彼をほどいてやって、帰らせなさい」。

●序論
まず旧約聖書で「信仰の父」と呼ばれるアブラハムについて記した言葉を…
ローマ4:17-22
4:17 「わたしは、あなたを立てて多くの国民の父とした」と書いてあるとおりである。彼はこの神、すなわち、死人を生かし、無から有を呼び出される神を信じたのである。
4:18 彼は望み得ないのに、なおも望みつつ信じた。そのために、「あなたの子孫はこうなるであろう」と言われているとおり、多くの国民の父となったのである。
4:19 すなわち、およそ百歳となって、彼自身のからだが死んだ状態であり、また、サラの胎が不妊であるのを認めながらも、なお彼の信仰は弱らなかった。
4:20 彼は、神の約束を不信仰のゆえに疑うようなことはせず、かえって信仰によって強められ、栄光を神に帰し、
4:21 神はその約束されたことを、また成就することができると確信した。
4:22 だから、彼は義と認められたのである。

ここに、それはアブラハムが義と認められる信仰が語られています。　「彼はこの神、すなわち、死人を生かし、無から有を生み出される神を信じたのである」と。
今日、このアブラハムの記事からも、結論を申し上げることができます。
　アブラハムは、ただ神さまを知っているだけでなく、神さまに期待していただけでなく、神さまを信頼していた。それこそイエスさまが語る信仰であったのです。

●本論
Ⅰ．「わたし(イエス）を信じますか」との問いかけ。
ここでひとつの質問に目を向けておきましょう。
「あなたは神さまを信じていますか？心から信じていますか？」

実はこの質問のその真意は何か？ということです。

イエスさまはラザロの死の悲しみのただ中、その姉妹マルタに向かい、23節「ラザロはよみがえるであろう」とはっきり告げられました。
それに対してマルタは、「:24 終りの日のよみがえりの時よみがえることは、存じています」と答えています。
さらにイエスさまはこう言われました。
:25-26 ･･･「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとい死んでも生きる。 また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。あなたはこれを信じるか」。
そう問うた時、マルタは
:27･･･「主よ、信じます。あなたがこの世にきたるべきキリスト、神の御子であると信じております」と答えているようすを見ました。

以前に、このヨハネの福音書には会話の ちぐはぐをよく見かけるとお話しました。
イエスさまは、霊的な事柄を語り、人は地上のことを語るからです。
ここでも、なぜしっくり来ないのか、イエスさまは、今、まだ人が見ていない事実、復活の命と現実のよみがえりという「(霊的なゆえに)信仰で受けとめるべき事柄」を語り、マルタはその経験と教育から「知っていることがら」を「信じている」と言って告白しているからです。
イエスさまは決して、その「知っていることを主張する信仰』というものを責めているのではありません。
むしろ、この人間的に、目に見える絶望状態の中で、その「自分は知っているだけなのだ」という信仰の事実に気づかせてくださり、またそこから、イエスの言われる信仰の世界へと近づくことができるように導いてくださるということです。

余談ですが、先日の葬儀の際、棺を霊きゅう車に入れる前に玄関口で、司式者が御言葉をこう宣言しました。
「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとい死んでも生きる。 また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。」と。
そこにいるみんなが「アーメン」と静かに応えていたことが印象的です。知っているから…というのではなく、御言葉の宣言に心を重ねて、こころから「アーメン(その通りです)」と一同は答えたのです。

Ⅱ．「もし信じるならば」というチャレンジ。
11:39 イエスは言われた、「石を取りのけなさい」。死んだラザロの姉妹マルタが言った、「主よ、もう臭くなっております。四日もたっていますから」。
11:40 イエスは彼女に言われた、「もし信じるなら神の栄光を見るであろうと、あなたに言ったではないか」。
ここで、だれの目にも、イエスさまは、その場の状況や現実的に無茶なことを言われているとしか、受けとめられませんでした。そこで「信じるならば…」と言われても。

確かにイエスさまはこれまでに何度も「信じるか？」と問いかけてこられました。
そして今「もし信じるならば」と言われる。それは何を信じることなのでしょうか？

今日、ここで一番大切なのは、”語られ、命じられる、イエスさま”を心から、そして親しく信頼することを言っているだということです。
あらゆる常識や、状況、そして自分の持つ知識や経験にまさって、イエスさまに信頼を寄せるということです。

わたしたちは、その信仰の始まりに、何によって救われたのでしょうか？
イエス・キリストの十字架そして復活、その愛によって救われた。それは知的理解として大正解です。　しかし、今日このところを通して知りたい。私たちは「出会い」によって救われたのだと。

わたしたちのために十字架にかかってくださったイエスさま。わたしを愛してくださり、今も愛し続けてくださり、そしてわたしを今も待ち続けてくださっている、”イエスさまと出会った”ことによって、この方を信じ救われたのです。
この方の愛を感じ、受け取り、救われたのだということを覚えていたいのです。

最初にお読みしたロマ4:17-22のところで語られていた「信仰の父」アブラハムの信仰もそうでした。彼の歩みはいくつもの失敗を重ねました。
それでもなお、聖書は彼のことを「神を信じた」人として表現しています。
それは、そういう失敗や挫折を通して、さらに深く神さまを知り、信頼するようになり、その信頼によってより深く親しく神さまと結ばれていった人であったからです。

だから、あらためて今日お読みしている、絶望的な状況の中においてもなお、そこにいる人たちは、本当の出会いとイエスさまとの結びつきに招かれていることを覚えます。

Ⅲ．「父よ、感謝します」という告白。
今日「イエスさまの語る信仰」の最後は、イエスさまご自身が父なる神さまと心の底から親しく、強く信頼によって結ばれたお方であるということが、その祈りで表されたという場面です。
そこでイエスさまがまっすぐ「感謝します」と語るその言葉が、これから起こることはすべて神さまとの心を一つとしたわざであることを示すに十分なものでした。

> 11:41-43 人々は石を取りのけた。すると、イエスは目を天にむけて言われた、「父よ、わたしの願いをお聞き下さったことを感謝します。 あなたがいつでもわたしの願いを聞きいれて下さることを、よく知っています。

それは、今あるこの悲しみをも、喜びに変える救いがあることを、そこにいる人々に示す。それがイエスさまのもって来られた福音であることを示すためです。
そうして人々が、イエスさまを信じるようになることなのです。
それはひとりよがりな願いではなく、父なる神さまと心を一つにしたものでした。

:42　…しかし、こう申しますのは、そばに立っている人々に、あなたがわたしをつかわされたことを、信じさせるためであります」。
こう言いながら、大声で「ラザロよ、出てきなさい」と呼ばわれた。

先週見た、「イエスさまが涙を流された」というイエスさまのお姿を思い起こしてください。イエスさまは、悲しむ人々の中に入って、そこでその悲しむ人々の思いに心を重ねて涙してくださるお方です。
そうして、わたしたちはこのイエスさまを心から迎えること、この方を信頼することによって、そこにその福音のみわざ、祝福を見ることができるのです。

ともに来て涙を流してくださるイエスさまと出会いました。そしてその悲しみ現場でも「信じるならば、神の栄光を見る」と語りかけるイエスさまの言葉は真実であると、あのラザロの復活を通してあらわされたことを見たのです。
11:44 すると、死人は手足を布でまかれ、顔も顔おおいで包まれたまま、出てきた。イエスは人々に言われた、「彼をほどいてやって、帰らせなさい」。
ここで悲しみは、驚きに、そして喜びに造り変えられました。

●さいごに
11章を取り上げたここ数回の礼拝メッセージを、聞き返し読み直していました。
その最初の方に、あのラザロが病に倒れたという一報が届いた。しかし聞いてなおも２日間、その場所にとどまられたのか、人々には不思議に見えたことでしょう。

そこで私はこう言いました。「『神さまのご計画はわたしたちにはわからない』」というところから、わたしたちは始めることができるのです」と。
それは、神さま、イエスさまを信頼して、ともに歩む旅路のはじまりとなるのですと。
「わたしの信じる神さまは良いお方である」と告白して。
そしてそこからは、人がつくりあげた人の力によるものではない、神さま由来の希望の光を見いだす物語が紡がれてゆくのです。
それがイエスさまと共に紡ぎ歩む新しい物語です。
まさに「信じるなら、神の栄光を見る」と示されているのです。

改めて、申し上げましょう。
私たちの努力や経験や知識から始まった救いはないということに気づくことは大切です。神さまはじまり･･･だから良いんです。それがイエス・キリストの福音です。
私たちのもとに来られ、共に涙を流してくださり、身代わりとなって傷を受けてくださり、私たちのすべての罪を背負って十字架で死の苦しみを持って命を捨ててまで、私たちを愛してくださったお方を、聖書は救い主として示し、この方のもとに私たちの歩みは紡がれていくことを覚えるのです。
だからこの方を信じることです。そうして「この方を信じるなら神の栄光を見る」という、そういう物語をこれからも紡いでいくのです。